

[21] 「赤字」と「紅字」はどう違う？ 色彩語の話（3）

“紅”はまた事業などが順調であること、人が成功して人気があることをいうのにも使われる。“他现在特别红”（彼は今をときめいている）。“那个演员红极了”（あの俳優は人気絶頂である）。“开门红”（kāiménhóng——事業などが幸先よいスタートを切ること）。“红人”（hóngrén——人気者、寵児）。

「あか」を表すのに現代中国語では“赤”よりも“紅”が多く用いられることは、前回記したとおりである。“赤”が火の盛んに燃えるまっかな色をいったのに対し、“紅”は白色がかった桃色をいったらしい。『論語』に孔子が衣服には紅色を用いないと言っているのは、“紅”が中間色であることを嫌ったからであるとされている。

なぜ“赤”から“紅”に変わったのかはよくわからないが、“紅”に“深紅”“鮮紅”などその程度を強める“深”（shēn）“鮮”（xiān）などの修飾語を伴う用法があるのは、“紅”がもともとは濃い赤色を示す語ではなかったからに違いない。

生まれてまもない子を「赤子」（あかご・せきし）と呼ぶのは日本語も中国語も同じ。「まっか」かどうかはともかく、生まれたての子は確かに赤い色をしている。

中国語の“赤子”（chìzǐ）は現代では「あかちゃん」の意味で一般に使うことはなく（「あかちゃん」は“嬰兒”（yīng’ér）, 話しことばでは“娃娃”（wáwa）, “赤子之心”（chìzǐ zhī xīn——赤ん坊のように純真な心）, “海外赤子”（hǎiwài chìzǐ——海外にあって母国に純真な感情を寄せる人）などのように限られた使い方しかしない。

生まれたての赤ん坊が体になにもまとっていないところからの連想であろうか、“赤”は体を露出する、むき出しにするという意味で使われる。“赤膊”（chìbó——肌脱ぎになる）。“赤脚”（chìjiǎo——はだしになる）。“赤裸裸”（chìlǚlǚ——丸裸である、むき出しである）。

さらに転じて、何もない、無一物であるという意味にもなる。「赤貧洗うがごとし」の“赤貧”（chìpín）。「赤手空拳」（手に何も持たないこと、徒手空拳）の“赤手”（chìshǒu）。

中国語の“赤”が色彩語としては比較的限られた使い方しか持たないのに対し、日本語の「赤」（あか・せき）は赤旗、赤信号、赤土、赤とんぼ、赤面、赤十字（中国では“红十字”（Hóngshízi））など使用範囲は広い。

「赤字」が文字どおり「赤色で書いた字」のほか、「支出が収入を超過して欠損を生じること」をいうのに使われるのは、簿記で欠損を赤インクで記したところから。この意味では中国語も“赤字”（chìzì）を使っている。古語の“赤字”を継承したのであろうか。それとも日本語の「赤字」の用法に倣ったのであろうか。

日本語の「赤字」にはもう一つ、校正で書き入れた文字や記号をいう使い方がある。この場合の中国語は“紅字”（hóngzì）であって、“赤字”とは言わないようである。日本語でも前者（欠損の意味の赤字）を「赤」、後者（校正の赤字）を「朱」と使い分けることがあるのは興味深い。

2007/11/16